

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2173300043		
法人名	有限会社 しましまハウス		
事業所名	しましまハウス宮川		
所在地	飛騨市宮川町巣之内63		
自己評価作成日	令和5年8月22日	評価結果市町村受理日	令和5年11月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaiyokensaku.mhlw.go.jp/21/index_nhp?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JigvossvoCd=2173300043-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ぎふ福祉サービス利用者センター びーすけっと
所在地	岐阜県各務原市三井北町3丁目7番地 尾関ビル
訪問調査日	令和5年9月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>当施設は自然豊かな地域の中にあり、季節の移り変わりを肌で感じられます。また、ご利用者と職員の距離も近く家庭的な雰囲気が味わえる施設です。ご利用者の方々には可能な役わりを持っていただき、毎日の習慣として継続できています。それが皆さんの自信と活気に繋がり笑顔の源になっています。</p>
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>事業所は自然豊かな場所にあり、利用者と職員は地元出身者が多い。利用者は、慣れ親しんだ土地で親しみのある高山弁が飛び交う中、他の利用者や職員と家族同様に日々を過ごしている。利用者子ども世代は地元を離れて暮らす事が多く、残された高齢の親が安心して暮らせる事業所は、地域住民にとって欠かせない存在となっている。新しい管理者と30年以上認知症介護経験を持つ職員に、前管理者が運営について指導をしながら、基盤のしっかりした温かみのあるホーム作りを行っている。利用者の表情は穏やかで、個々の残存能力を活かした役割を生き生きとこなしている。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
43 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:15)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	50 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:8,9)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
44 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:14,27)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	51 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度ある 3. たまに 4. ほとんどない
45 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:27)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	52 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:3)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
46 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:25,26)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	53 職員は、活き活きと働いている (参考項目:10,11)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
47 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:36)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	54 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
48 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:20)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	55 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどいない
49 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:18)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	自然に囲まれ住み慣れた地域で、認知症であつても持てる力を発揮し生き生きと暮らしていただける支援を目指している。	同法人が経営する3つのグループホームの理念は同じもので、グループホームが目指す支援内容がすべて含まれ、長い文言となっている。リビングの壁に掲げてあるが、字が小さくわかりにくい。	理念はあるが、長文の為、職員に浸透していないのが残念である。今の理念をベースに、職員が覚えやすい文言の検討を期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍の継続によりこちらから出向くことは難しいが、地域の方による草刈や雪囲いの作業を通して少しでも交流の場が持てるよう努めている。	地域の老人会には草刈りや、冬の雪囲いも協力してもらっている。ホームの建物は旧小学校であり、その後、公民館として使っていたので、前庭がゲートボール場となっており、老人会の人が集まっている。コロナが5類になって、少しずつ地域とのつながりが戻ってきている。	
3	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍で運営推進会議の開催が困難であつたため、文章にて施設の状況やサービス内容の発信に努めた。	コロナ感染予防のため、今も書面会議となっている。運営推進会議資料は構成メンバーや家族に送り、意見が書き込める用紙も入れているが、特に意見は届いていない。コロナが5類になったので、令和6年3月からは対面に戻す予定である。	
4	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	コロナ禍でも各関係者或いは医療機関との連絡を密に行い、サービスの向上に取り組んでいる。	市町村へは本部が窓口となり、道路の崩壊などがあつた時は素早く市に報告をし、改善してもらっている。普段は管理者が相談や連絡を行い、空き室が出た時は地域包括支援センターに連絡している。市からは研修の案内等情報を得ている。	
5	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束についての勉強会の実施や日々のケアの中での情報共有や対応方法の検討を行い、全職員で身体拘束をしないケアに努めている。	定期的に委員会を開催している。コロナ禍による支援環境の中で、スピーチロックや身体拘束の実態はないかを確認をしようと、職員の自発的な動きがあり、職員全員で身体拘束をしないケアの実践について、再確認している。	
6	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束が虐待に繋がることを職員間での共通認識とし、事例検討を行いながら虐待防止に努めている。	運営規定は、身体拘束適正化と虐待防止をきちんと分けて明記されている。虐待防止については、身体拘束適正化委員会と併せて行っているが、虐待防止を話し合った内容は議事録として残していないため、今年度中には整備していく予定である。	虐待防止についての指針の整備、委員会の議事録、研修記録の作成等、事業所として必要な書類を整備した上で、虐待防止の徹底に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、自立支援事業や成年後継制度の必要性や緊急性が低いので、知識として学ぶ機会を設けている。		
8		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結または改定等の際は、十分な説明を行い理解や納得を得ている。		
9	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時や電話連絡等、家族の要望や意見を聞き運営に反映できるように努めている。	毎月、法人合同の通信と共に、利用者が書いたメッセージと担当者のコメントを合わせたメッセージカードを家族に送り、電話で意見や要望も聞いている。玄関に意見箱を設置し、以前面会について問合せがあったが、コロナ感染予防の為、事業所の事情を伝え納得してもらっている。	
10	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期的なスタッフの会議の中で介護内容のみが中心にならず、できるだけ運営に関する意見や提案を聞くように努めている。	管理者は、定期的に関くミーティングや日頃の業務の中で、職員から意見や要望を聞いている。記録は月・木に全職員で回覧し改善に繋げている。移動販売車の提案、タオルをかける位置を利用者が使いやすいよう工夫するなど、職員の意見を取り入れながら、支援に反映させている。	
11	(9)	○就業環境の整備 代表者は、管理者及び職員個々の努力や実績、勤務状況を把握するとともに、職員が向上心を持って働けるよう、ワーク・ライフ・バランスに配慮した職場環境や就業条件の整備に努めている	スタッフ個々の意見や要望をできるだけ聞き入れ、働きやすい環境で向上心を持って働けるよう、ワークライフバランスに配慮した職場環境、就業条件の整備に努めている。	勤務希望や雇用形態について、職員の要望を聞きシフトを決めている。利用者が居室で休む時間帯に職員が交代で休憩を取ったり、急な休みの際も職員間で協力し合っている。管理者は、常に職員の様子を見て声掛けし相談に応じるなど、ストレス軽減を図っている。	
12	(10)	○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍で研修機会は極端に減少してしまったが、できるだけ社内研修を行いスタッフの資質向上に努めている。	資格取得のための研修は、オンライン環境が整っている同法人の他事業所で受講している。身体拘束についての研修のみ、実施することができた。勤続年数の長い職員がおり、業務の中での気づきや他の職員の分からない事を伝達しながら、全体の資質向上に繋げている。	コロナ禍で、十分な職員研修ができない状況にある。介護の資格を持たない職員の技術や知識を習得する機会として、職員の資質向上に向けた研修の充実、及び記録の作成にも期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会づくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	ケアマネの交流は定期的には実施しているが、他の同業者との交流はほとんど行っていない。サービス向上のため交流会については検討していきたい。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
14		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	認知症のご利用者が持てる力を発揮して生活できるよう、必要な支援を行いながら暮らしを共にする関係を築いている。		
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
15	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご利用者個々の生活のペースや暮らしの希望などについて、日々の様子を観たり話を傾聴しながら利用者本位を基本にケアしている。	日頃の利用者との関わりの中で、個別の思いや願い事を把握し、業務日誌に記録しながら職員間で共有している。特に、入居して間がない利用者や状態に変化がある利用者の個別ノートには、詳細に状況を書き、職員間で共有し支援している。	
16	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人がより良く暮らすためのケアのあり方について、本人・家族・職員と話し合い現状に即した介護計画を作成している。	毎月末にモニタリングを行い、月初めにそれを評価し、職員間で情報共有している。プランの見直しは基本的に年1回、担当職員が中心となり、家族や本人の意見、思いを組み入れ、計画作成者が見直しを行っている。状態の変化が合った場合は、その都度、見直している。	
17	(13)	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の暮らし方や身体状況についてモニタリングを繰り返しながら、ケアの実践や現状に添ったプランの見直しに繋げている。	日々、身近でケアに当たる職員しか知り得ないケアの気づきや事実も、業務日誌に詳細に記録している。他の職員は内容を確認後に押印し、職員間で情報の伝え漏れがないようにしている。ケアマネジャーは介護サービス経過記録にも、気づきを記入している。	
18	(14)	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ禍で多くの日常の行動が制約されているが、基本的には本人や家族のその時々生まれるニーズに柔軟に対応できるよう、サービスの多機能化に努めている。	協力医への受診は事業所で支援している。また、月に1回移動販売車に来てもらい、利用者が個々に好きな菓子などを購入するなど、買い物の楽しみを作ってもらっている。様々な利用者のニーズに柔軟に対応している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	自由な外出がまだできない現状の中、買い物支援や誕生会等の行事、文化祭の作品出展などで少しでも楽しめる場を持っていたるように支援している。		
20	(15)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診については契約時に説明し本人・家族の希望を大切にしている。かかりつけ医と事業所の連携で適切な医療が受けられている。	契約時に、かかりつけ医の選択ができることを伝えている。医師不足という地域事情もあり、協力医の往診が中止となり、職員が付き添い受診となっている。協力医以外の受診は、家族が付き添っている。緊急時は、利用者情報をシートにまとめ渡せる用意がある。	
21	(16)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院の際は安心して治療が受けられるよう、またできるだけ早期に退院できるよう病院関係者と綿密な情報交換を行っている。	入院は利用者の心身に大きな負担を与える場合があり、詳細な個別情報を医療機関へ提供し、連携を密にしている。退院時には、事業所に戻れるよう支援体制を整え、家族の安心に繋げている。	
22	(17)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に重度化した場合の説明を行い、納得して入所されている。終末期に至る経過へのケアについては、ここで実施できる体制を説明している。	契約時に、重度化や終末期の対応について家族に説明し、同意を得ている。入浴支援は一般個浴の浴槽である為、跨ぎ動作が困難になったり、要介護3レベルの段階で、状況の変化を見ながら早い段階で医療機関と相談するなど連携を図っている。	
23		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	日々の介護や支援に於いて遭遇する急変や事故については、今までの対策を含め再確認やシュミレーション行う等更なる備えが必要である。		
24	(18)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	コロナ禍であるため行動を伴う想定訓練は十分できなかったが、災害を設定した連絡網や役割分担等の机上訓練を行った。	2年前、台風の際に避難所に行ったが、認知症である利用者が困惑し、結局、事業所に戻ったという経緯がある。行政と話し合い、水害時は事業所での垂直避難が望ましいとなった。災害時において、各利用者に避難用リュック、ヘルメット、防災頭巾を用意し、備蓄品や発電機なども整備している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
25	(19)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々の心身状況や認知症における周辺症状を理解した上で、ご利用者の尊厳を守る対応に心掛けると共に、ご利用者がどんな言葉を掛けてもらえるかと安心して嬉しいかという事を意識して、言葉かけや態度に気を付けるようにしている。	浴室が二つある。脱衣場は共有しているため、カーテンで仕切り、利用者のプライバシーを守るよう配慮している。同性介助希望にも対応している。夏場は居室のドアを開けて暖簾を掛け、廊下から中が見えないよう工夫している。	
26		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の様々な場面で細やかな声かけを心がけ、ご利用者がご自分の思いや希望を表出できるような関わり方に努めている。		
27		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	大まかな日課はあるがそれだけに捉われることなく、また職員の都合を押し付けることなくご利用者の思いやペースに添って過ごせるように支援している。		
28	(20)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	施設で採れた野菜を使用した料理を提供したり、一人ひとりの力を活かしながら職員と一緒に準備や後片づけを行っている。	配食サービスの食材を使って、三食手作りの食事を提供している。利用者と職員が協働で作った野菜や、地域住民からの差し入れ野菜なども活用している。朴葉寿司や栗ご飯など、季節のメニューを取り入れたり、芋餅などのおやつ作りは利用者も楽しみながら、皮むきや食器の片付けなどに参加している。	
29		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの摂取量に合わせた食事量の調整や食形態の工夫を行っています。夏場は水筒にお茶を入れ水分補給していただき脱水予防に努めています。		
30	(21)	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは習慣化しており、その都度声掛けや介助等の必要な支援を行い、口腔内の清潔保持に努めている。	毎食後、利用者それぞれが棚から自分の名前の付いた歯磨きセットを取り出し、口腔ケアを行う事が習慣化している。状況に応じて職員がフォローするときもある。代表が歯科医師であり、義歯等に不具合が生じた時は調整している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	排泄状況の記録からご本人の排泄パターンを知り、トイレ誘導や必要な支援を行いながら排泄の自立に向けた支援を行っている。		
32		○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴は生活の楽しみの一つであり、声掛けの段階から入浴を楽しんでもらえるよう対応している。また、受診の時は前日に入浴できるように配慮している。		
33		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ご本人の身体状況やその時の体調に応じて居室でゆっくり休息・安眠ができるよう環境を整えた上で、安心できる声掛けに配慮している。		
34	(22)	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の服薬の目的と副作用等の情報の理解に努め日々様子観察すると共に、薬の変更や追加の場合は症状の変化を確認し情報共有している。	服薬時には、職員が声出し確認で薬袋の名前と本人を確認し、飲み終わるまでを見届けている。投薬表に服薬担当者の名前を明記し、責任を持って誤薬防止に努めている。処方内容変更時は利用者の様子を観察し、状況を医師に報告している。	
35	(23)	○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ご利用者個々の持てる力や生活歴も参考にしながらどのような過ごし方を好まれるかを理解し、楽しく気分よく過ごせるようにしている。	全利用者のやりたい事の希望を聞き、職員と一緒に話し合っ「仕事分担表」を作っている。掃除機をかける人、台拭きをする人、洗濯物を干す人等、楽しみながら活動している。また、手芸が得意な利用者が、移動販売車で買い物用に、全利用者に籠を編んでプレゼントするなど、利用者自身の喜び、楽しみとなっている。	
36	(24)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍の継続で外出制限があるため周辺の散策程度となっているが、ご本人の行きたい時に気分転換に出かけられるようにしている。	遠方や人の集まる場所への外出は、コロナ感染予防のため自粛している。下肢筋力の低下予防の為、2階にある浴室には階段を使うようにしている。普段は近くの神社や周辺を散歩したり、庭先で食事を楽しむなど、利用者の気分転換を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者の方で現金を所持されている方はみえないが、飛騨市が発行するサービス券を利用して、月に1回移動販売での買い物を楽しんでもらっている。		
38		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自由に外出できない現状の中で、ご利用者の精神的ケアの面でご家族との電話や手紙は可能な範囲で行っている。		
39	(25)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	限られた設備や空間において、清潔で明るく過ごしやすい温度設定に気を配ると共に、花や掲示物等で居心地良い空間作りに努めている。	各居室の窓からは里山の風景が眺められる。ホールや廊下にソファが置かれ、気の合う者同士が雑談しながら、のんびりと過ごしている。ホールには洗面台が3つあり、使いやすく配置されている。建物内は階段やスロープがあるが、生活リハビリとして、活かされている。保護猫を飼っており、利用者の癒しとなっている。	
40		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関先のベンチや2階のソファでご利用者同士が気の合う方と過ごしたり、独りで気楽に過ごせるような空間作りをしている。		
41		○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居前の説明の段階でご本人やご家族に馴染みの物の持ち込みや居心地の良い居室作りについて協力頂いている。		
42		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	認知症の症状に応じて建物内の場所が分かりやすいように貼り紙をしたり、目の届きやすい所に必要な物品を置くなどして混乱を少なくしている。		